

短編

山中興隆

# 三坂峠一話

お蓮、勘定術 恋恋の墓  
縁のトコネルで



Duo-yamanka

三坂峠

(二話構成)

---

山中與隆

## 目次

三坂峠 (二話構成) 1

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫ 2

第二話 ≪緑のトンネルで≫ 59

編集後記 103

編者あとがき 113

三坂峠  
(二話構成)

作 山中與隆

- 〔第一話 お蓮・勘兵衛 悲恋の墓〕  
〔第二話 緑のトンネルで〕

## 第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

お蓮は、浜田藩の役人伝助に恋われて十六で嫁いでから七年になる。伝助は役人と言つても同心、役人の中では位の低い部類で暮らしは楽ではなかつた。それでも一応安定して平穩な毎日を送っていたと言つていいだろう。お蓮、伝助夫婦にはまだ子供がなかつた。城下町浜田のはずれ近く、石見街道が中国

山地に入っていく入口近くに、二人の住む長屋はあった。

ある年、浜田から出雲にかけて海岸線の大々的な測量が行われることになり、その応援のため天文技師など十数名が芸州から招かれた。彼らはその前年から瀬戸内の海岸線の同様な測量に加わった経験が買われて招かれたのであった。その中の一人に勘兵

衛という者がいた。しかし勘兵衛は任の途中で病に倒れ、一時仕事からはなれて、伝助の住む長屋の空き部屋に置かれて療養することになった。その世話を任されたのが伝助であり、食事から掃除洗濯まで実際の世話をすることになったのは、伝助の女房お蓮であった。伝助は日中役所に出勤し、午後帰宅するとお蓮から、その日の勘兵衛の病状などを聞くのが仕事であった。そしてときどき医者に勘兵衛を診

察してもらうのであつた。

勘兵衛の容態は始めのうちはかなり深刻で、医者もこれではよくなるとしても、当分仕事に戻れる可能性はないから、できれば国に戻した方がいいと言つた。しかしそのときは、勘兵衛の身体がすっかり衰弱していて動かせる状態ではなかつた。それなら、病状が落ち着くまで伝助のいる長屋に空き部屋があ



るので、そこで療養させようと言うことになったのである。

長屋に來た勘兵衛は、始めのうちは厠にも這うようにして行く状態であつた。お蓮が持つていく食事もほんの僅か口にするだけで、それも吐いてしまうことがしばしばであつた。お蓮はそれらの始末を、小言一つ言わずにするのだった。伝助は、勘兵衛が寝たきりの陰気な部屋にはほとんど行こうとせず、

お蓮がどれほど大変な介護をしていたかも知ろうと  
しなかつた。ただお役目として、他州から招いた技  
師であるからそれなりのことはしなければならぬ  
として、そのほとんどをお蓮に押し付けていたので  
あつた。

勘兵衛の病状は、本人の若さゆえの治癒力と、お  
蓮の看病の甲斐あつてひと月もすると目に見えて快  
復に向かい始めた。そうなるに早いもので、床の上

に起き上がって食事ができるようになり、厠に行くのもなんとか伝い歩きできるようになっていた。天気のいい日には、道に面した障子を開けて陽に当たりながら外を眺めたりすることもあった。

伝助は、勘兵衛の病状が良いほうに向かったことで、役目を果たせそうなので安心した。そのせいか、役人仲間と遊んで帰ることが多くなり、ますます病人の世話はお蓮任せとなつていった。伝助とお蓮の

間に子供は無い。連れ添った当初伝助はさかんに子供をほしがったが、二人の間に出来ないとわかると次第に夫婦の間は冷たくなり、外で遊ぶようになっていた。夫婦生活もたまに伝助が自分の欲求のはけ口にする以外は、お蓮から求めても応じることはなかった。そうになったのは子供が産めない自分が悪いからだと思いきんでいたお蓮は、そんな伝助にもいっしょうけんめい尽くすのだった。

病人が重態の間は、近所の人たちは勘兵衛の姿を目にするともなく、ただお蓮のかいがない世話振りに感心していた。汚物のついた着物を洗濯するお蓮に同情を寄せたりもした。しかし、勘兵衛が縁に腰掛けて外を眺めたり、通りに面した障子を開けたまま、部屋で書物を読んだりする姿を目にするようになる、近所の者は勘兵衛が若く凛々しい青年であることを知った。そして伝助のいない日

に、お蓮が夕食を運んでいって、薄暗い行灯の前でぼそぼそ二人で話しながらいるところを見て、さしたる根拠もなく色っぽい噂にし始めるのだった。

勘兵衛は、病に倒れてこの長屋に寝かされてからは、お蓮が唯一の頼れる人であった。お蓮は、病の間自分のすべてを世話してくれた人であり、信頼の情は特別に篤いものがあつた。お蓮とたまに来る医

者とが、この一か月以上の間、勘兵衛が目にした人間のすべてであつた。仲間の技師たちは、海岸線を出雲に向かつて移動しながらの仕事なので、勘兵衛を見舞うことは出来なかつた。

勘兵衛は、お蓮が役人伝助の女房であることは知つていたが、伝助その人の姿をはつきりと見た覚えはなかつた。それもそのはずで、伝助は勘兵衛が頭も上がらない重態のときに二、三度覗いただけで、

あとは一度も勘兵衛の部屋に来ていなかっただのである。

三月目に入つて、勘兵衛の病はほとんど快復した。勘兵衛が床についている間に測量の仕事は一段落して、技師の一行はすでに芸州に帰国していた。当然病癒えた勘兵衛は国許に帰ることになる。勘兵衛はそのころにはお蓮に感謝の気持ち以上のものを抱くようになっていた。お蓮の器量は十人並みといった



ところだが、優しく接してもらっている勘兵衛からみると、日を追って美しい女性として見えるようになった。しかも大変な恩を受けた人であり、その人の夫にも役目とはいえ大きな恩を受けていることはよくわきまえていた勘兵衛は、自分のお蓮への気持ちをあつてはならないものと押し殺していた。

お蓮の方も、自らの看病の甲斐あつてみるみる快

復していく勘兵衛を見て我がことのように嬉しく思  
い、また凜々しくも穏やかで礼儀正しい態度を好も  
しく思っていた。

長屋の女たちの不用意な噂話が耳に入った伝助は、  
ある日お蓮を問い詰めた。おどろいたお蓮の否定の  
弁を聞きもしないで平手でお蓮の頬を打った。この  
ようなことが何度も起きたが、お蓮は勘兵衛の世話

を同じようにかいがいしく続けた。伝助がお蓮に辛く当たれば当たるほど、お蓮にとって勘兵衛の優しく物静かな人柄は救いであり逃げ場のようになつていった。

伝助のお蓮への暴力は二晩三晩続くこともあつたが、お蓮は噂を否定しながら懸命に耐えた。しかし伝助は自分の暴力に裾を乱してのけぞつたお蓮にのしかかつて、自分の欲望を果たすことに快感を覚え

るようにさえなつていった。そんなときお蓮はひたすら屈辱と苦痛に耐えるのだつた。

勘兵衛はこのところお蓮の頬や腕に痣が絶えないのに気付いていた。伝助の荒々しい声が漏れ聞こえてくることもあったので、それが原因かもしれないと思つたが、まさか自分とお蓮の噂が原因だとは思ひ及ばなかつた。

ある夕食のあとで勘兵衛はお蓮に言った。

「おかげさまですつかり体の調子が元に戻りました。もうそろそろ安芸の国への旅もできると思います。

明日にでも、旦那さんと藩の役所にご挨拶して、おいとましようと思います」

そして、心ならずも言葉を継いだ、

「お蓮さんには、本当に何とお礼をいったらよいかわかりません。できることなら、私の国までお連れ

したいくらいです」

勘兵衛の言葉の、この最後の部分をお蓮は、ただの冗談とは思いたくなくかつた。二人とも、これまでの立場をわきまえた、節度ある態度に終始してきたのだが、勘兵衛のその言葉で堰を切つたように感情が流れ出した。お蓮と勘兵衛は、見つめあい手を握りあつた。しかし、勘兵衛がさらに身を寄せようとすゝるお蓮を押し離した。

「いけません。大恩ある方の・・・」

後は言葉にならなかつたが、必死で自分の感情を抑えているのがお蓮にも伝わってきた。お蓮は小さな声で言った。

「私を連れていってください」

そう言ってから、そんなことを言った自分に驚いた。しかし、後悔はなかつた。ずっと前から、お蓮の中では勘兵衛が誰よりも大きな存在になっていた。そ

れは夫伝助との隙間が大きくなるに従つて揺るがしがたいほどになつていたのである。二人とも不義密通が死罪をも覚悟しなければならぬことは百も承知であつたが、いまはそんなことを考える余裕はなくなつていた。

二人は、その夜のうちに簡単な支度をして、あたりが寝静まるのを待つて長屋を抜け出した。勘兵衛



は伝助や藩の担当者たちに挨拶もなしに旅立ったのである。これは不義密通に加えて大きな咎となることであつたが、勘兵衛もそのようなことを考える余裕はなくなつていた。

石見街道を南下して三坂峠を越えれば安芸の国に入る。浜田藩の管轄外に出ればひとまずは安心だと考えた。勘兵衛は健康なときの自分の足なら十時間

も歩けば峠まで行けると思った。しかし、病み上がりの身であり、女の足も考えなくてはならない。今夜のうちには少しでも遠くまで行き、また夜を待って歩けば明後日中には峠に行き着くと考えた。お蓮の夫伝助は今夜もどこで飲んでいるのか、幸いなことに帰って来そうにない。明日の午後帰ってきて、お蓮と勘兵衛がいないことに気が付いて、それから追いかけたとしても、峠を越す前に追いつかれること

はないだろうと考えた。それにすぐに追いかけ始めるとも限らない。

夜の山道は暗い。薄雲をすかすようにぼんやりした月の明かりが二人の足下をかすかに照らしていた。旭の湯治場のあたりで夜が白んできた。このあたりの百姓たちの朝は早い。二人は人目を忍ぶために旭峡の奥まった滝の近くにある大きな岩の上で疲れ

た身体を休めることにした。お蓮は痛くなつた足を谷川に浸して癒した。勘兵衛はそうしているお蓮の後ろから両肩に手をかけて言った、

「お蓮さん、後悔してないですか」

お蓮は、

「『さん』は止めてください。勘兵衛さんこそ後悔しているのではないでしょうね。私はいま喜びでいっぱいです。私のことなら一切心配しないで下さい」

勘兵衛はそのままお蓮を抱きしめた。お蓮は足を水からあげて向き直ると、勘兵衛の首に両腕で抱きついた。二人は滝のしぶきで湿っぽくなっている岩の上にならぬように倒れこんだ。二人は知り合つて以來始めて情を交わした。堰を切つたようにほとばしり出る官能の情で、すべてを忘れて激しく交わつた。昂揚した官能が徐々に静まつていくときになつて初めて、二人はそこがやたらに蚊が多いところであ

ること気がついた。二人とも太腿も、腹も首筋も蚊に食われていた。搔きながら顔を見合わせて笑った。刹那的な幸せに浸ったひと時である。

お蓮は伝助との惰性のような情交のことが脳裏をかすめた。それに比べるといまのは、幾度も繰り返されてきた伝助とのそれとは、まったく別次元の出来事のようにだと思った。精も魂も使かい果たしてしかも充足感に満たされたのである。お蓮はこのよう

な経験は始めてであつた。体の芯にいつまでも官能が余韻となつて残つていた。

お蓮が看病をしているとき、だいぶ快復したところに勘兵衛の身体を拭いてやったことがある。そんなときに、勘兵衛が勃起しているのに気が付いたことがある。もちろんお蓮は見なかつたような振りをしていた。また勘兵衛の衣類を洗濯するとき、夢でも

見て漏らしたのか下帯に付いた黄色いしみにも気付いたことがあつた。そんなとき、お蓮はいやらしいと感じたことはなく、むしろ自分が慰めてやれたらと恥ずかしい想像をして自分に赤面したものであつた。いま心行くまで勘兵衛の精を受け止めることができた満足感は計り知れなく大きなものであつた。勘兵衛も、自分のすべてをお蓮に注ぎ込んだような満たされた気持ちであつた。



身づくろいをしてから、お蓮が用意してきたにぎりめしで二人は空腹を満たした。

「これからどうなるのですか」

とお蓮が訊いた。勘兵衛は、

「ここでしばらくは体を休めることにします。蚊は多いが、人に見つかるよりはましです。さつき降りてきたときに見ましたが、歩いてきた岩には苔がついていて、人が歩いた形跡はありませんでした。お

そらくしばらくは誰も降りてきたことがないのでしよう。ここは安全です」

と、お蓮に心配させまいとして断定的に言つた。

「でも、私たちが休んでいる間に追いつかれませんか」

「いや、いますでに追いかけていゝとは思へません。第一どちらの方角に私達が逃げたのかさえ、判断するのに時間がかかるはずですから」

勘兵衛は自信ありげに言った。そしてさらに、

「伝助さんたちがこちらに向かつて追跡を始めるとしても、おそらく午後遅くからでしょう。あまり遅かったら、明日にするかもしれません。なにしろ追われる方と違って、追う方は命がかかっていない分余裕がありますから」

「うちの人には馬で追いかけるはずですから、すぐ追いつかれます」

お蓮は、勘兵衛がいくら自信ありげに言つても、心配でならない。

「馬といつても、早馬のようにどんどん新しい馬に乗り換えて走りつづけければ、たしかにこちらがいくら急いでもすぐに追いつかれてしまふでしようが、一頭の馬でやってくるのなら、馬も休みやすみですから大丈夫です。今晚がんばって歩けば明日の朝には三坂峠を越えて芸州に入れるはずです。そうなれ

ば、大朝でも、八重でも宿でゆつくり湯を使つて、上手いものを食べましょう。多少の金はありませんから」

「三坂峠までに関所はないのですか」

「市木と言うところにあります。しかし私は芸州の役人です。それに役目で浜田藩に来た任命書も持っていますから大丈夫です。お蓮さん、いやお蓮……」

言い直したので、お蓮はにっこり笑った。勘兵衛は

続けた。

「お蓮は、浜田藩が病気の私のためにつけてくれた下働きの世話女ということにしましょう。私が病で後から帰国することは、先に通った私の仲間が関に伝えていってくれたはずですよ」

しかし勘兵衛のこの予想は少し違っていた。技師の一行は出雲一帯の調査を終えると、浜田には戻らず、そのまま出雲から広島に向かったのだった。

「わかりました、すべてあなたにお任せします」

「とにかく、浜田藩さえ抜ければ何とかかなりますよ」  
「あと一日の辛抱ですわね。それにしても蚊が多い  
ですね。私達の汗の臭いをかぎつけて、集まってきた  
ているみたいですわね」

二人は近くの葉の付いた木の枝を折って団扇代りに  
して蚊を追いながら、並んで横たわった。

二人は、昨夜一晚中歩きとおした疲れが急に体中

に広がり始めて、会話の中身が散漫になり始めていた。そのうち眠気が二人を襲ってきかた。いつのまにか二人ともぐつつすと眠りに落ちていった。足、手、顔と素肌が出ているところは蚊に刺され放題であったが、それにさえ邪魔されなほどの深い眠りであった。

ずいぶん眠っていたのだらう、二人が目を覚まし



たとき谷底は薄暗くなつていて、おまけに霧雨が降つていて、体中がしつとりと湿っていた。二人は無言のまま谷川の水で顔と口をすすぎ、残つたにぎりめしをひとつずつ食べた。家から持ち出した食料はこれで無くなった。

「もう少し暗くなるまで待ちましょう」  
勘兵衛が声を低めて言った。二人はここについたときとは違つて、これから夜道を歩く緊張感で無口で

あつた。

それからしばらくの間、二人は人生のこの劇的な展開のことと、これまで歩んできたそれぞれの人生に考えを巡らしていた。あたりは真つ暗になり、谷川のせせらぎだけが聞こえていた。ときどき闇を裂くような鋭い鳥の声があった。いつの間にか霧雨はやんで、待っていたようにそこら中の叢で虫が鳴きだしていた。

勘兵衛は黙ったままお蓮の手を取って立ち上がった。勘兵衛自身さっきの自信に満ちた言葉とは裏腹に、非常な緊張の中にあることが、手から手へとお蓮に伝わってきた。

二人は手探りで、暗い谷底からときどき足を滑らせながら這い上がった。街道に出たときには二人ともかなり肩で息をしていた。雲の切れ間からきれいな月が出て、二人と共に歩んだ。このあたりは熊や

猪が出ることであり、お蓮は熊を目撃したといった話をしばしば耳にしていたが、いま恐ろしいのは熊ではなく追っ手だけであつた。二人はほとんど無言で、相当の早足で歩いた。道幅があるところでは、勘兵衛がお蓮の手を取って歩いたが、道幅がせまくなるとお蓮は勘兵衛の後を、遅れないようにと必死でついて歩いた。

二人は、空が白みかけたころ溪谷の瀬音を聞きな

がら歩いていった。速水溪谷だなど勘兵衛は自分達のおよその位置を測った。やがて市木の町に入り、かぎ型の曲がり角を幾つか通つて関所に着いたとき、日はまだ昇っていなかつたがあたりはすっかり明るくなつていた。

関所は、勘兵衛が言つたとおり難無く通過できた。女を連れていくことには、やや不信そうな目を向ける役人もいたが、何と言つても浜田藩が要請した技

師という勘兵衛の身分がものを言った。

三坂峠まではあと僅かである。二人は安堵感から、関所の役人の口真似をするなど口数が増えてきた。

日が昇って少したつたころ峠を越した。峠を越すと、二人はようやく疲れていることに気付いた。道の脇の狭い谷川に降りて休んだ。手も足も冷たい水に浸すと、たまった疲れが溶け出していくように感じられた。二人は岩によりかかって肩を寄せあい、黙っ

たまま目をつぶって休んだ。

二人が大塚の集落に近づいたとき、後方から馬の足音が近づいてきた。しばらく追っ手のことを忘れていた二人ははっとして振り返った。そのときすぐ近くまで迫っていたのは、馬にまたがった伝助であった。伝助は、馬から下りると、呆然と立ちすくんでいるお蓮と勘兵衛に近づいて、

「二人とも何を驚いている。私はお前達を捕まえるつもりで追つてきたのではない。安心してよい」と思ひのほか穏やかに話し掛けた。そしてなおも声も出せないでいる勘兵衛に向かつて、

「勘兵衛殿、貴殿が病に倒れて無為の日々を送つたことには同情するが、世話になつた者の女房をさらつていくとは、少々礼に反するのではないか」と言ふと、今度はお蓮に向かつて、



「お蓮、おれは今この場でお前を切り捨ててもいいのだぞ」

と、これも言っていることには不似合いなほど穏やかに言った。勘兵衛は腰に刀をつけており、とつさにそれを抜いて伝助に切りつけようと思えばできそうな間隔で立っていた。しかしそれより前、そうしようと思えばとつくに後ろから二人を切り殺せたのに、そうはせず、刀も抜かず静かに話し掛ける伝助

に圧倒されて何もすることができず、思わず伝助の前に跪いてしまった。お蓮もそれにならった。伝助はさらに穏やかに、笑顔さえ浮かべて、

「まあまあ、そんなにしなくても、」

と道端に座り込んだ二人に、

「まあ聞け。わしはお蓮が勘兵衛殿に惚れていることはずっと前に気付いていたのだ。もちろん腹が立った。だが考えてみるとわしもお蓮にはずいぶんと

ひどい仕打ちをしてきた。だいたいわしの役目なのに、勘兵衛殿の世話をすべてお蓮一人に押し付けてきた。それだけでなく、お蓮に子供がないことを責めて、これ見よがしに他の女とも遊んだ。昨日の午後二人がいなくなつたのに気付いたとき、とつさに二人は勘兵衛殿の国に向かったのだと思つた。それで追つて来たわけだが、思つたとおりでつたというわけだ。始めは怒りで何も考えられずに馬を走らせ

ていたが、途中で手に手を取って逃げている二人が哀れに思えてきて、お蓮もわしの行状とあいこで許そうと思うようになったのだ。二人ともこのままでは咎人として一生身を隠して暮らすことになる。わしはお蓮を離縁して二人が正式に夫婦になれるように計らってやる。どうだね、このままわしと一旦浜田に戻ろう」

こう穏やかに語りかけられると、勘兵衛も、とり

わけお蓮は緊張の糸が緩み、涙さえ流すのだった。

伝助は馬には乗らず、手綱を引いて二人の前に立つて、いま来た道を歩き始めた。とうとうと説得の弁舌を振るった伝助も、それからもう何も喋らなかつた。そうして三人は無言で四時間も歩いただろうか、お蓮と勘兵衛が今朝早く越えた二坂峠まで来た。

伝助は振り返って、

「一服もせずここまで来てしまった。疲れただろ

う。少し休もう」

と言つて、自分から腰をおろして道の脇の木に寄りかかった。伝助は自分のために用意してきたと思われるにぎりめしを、三人で一つずつ食べようと言つて、勘兵衛とお蓮に渡した。二人は涙を流すようにして押し頂いてそれを受け取つた。しばらく休む間も三人は無言であつた。

しかしそうしている間も、勘兵衛は内心の迷いが

拭い去れないでいた。伝助がたいして怒りをぶつけもせず、晴れて夫婦にすると云ったことが信じきれなかつたのである。だが伝助は、勘兵衛が後ろから切りつけることを警戒していないかのように、刀を持っている自分の前に立って平然と四時間も歩いたではないか。信用していいのではないか。

一方伝助の性格を知っているお蓮は、あまりにもいつもと違う伝助の態度に、何事かを企んでいるに

違いないと確信していた。しかし、勘兵衛が信用しているようなので、やむをえずついて行くことになつてしまつたのである。だいたい、どうするかを二人で相談することなどできなかつたのである。

しばらく無言の休憩の後、伝助が先に立ち上がった。それにつられて勘兵衛とお蓮も立ち上がるうとした。その瞬間、伝助はこれまでとはうって変わつ



て殺気立った素早さで、刀を抜いて振りかざすが早いか、

「二人とも、これまでだ。ここは浜田藩だ。不義密通の者を切ってもわしは咎を受けることはない。覚悟せい」

と叫んでまず、慌てて腰に手をかけた勘兵衛の首を一刀の下に切り落とした。顔面蒼白で立ちすくむお蓮に、

「おのれ、わしの無念がわかるか」

と叫びながら鋭く刀を振り下ろした。お蓮の首は勘兵衛の首とは反対側の道の端に転がった。首のないふたつの胴体だけが血しぶきを上げながら重なるように倒れた。

伝助は、二つの胴体を道の脇に並べて寝かせてそこに置いたままにして、二つの首を布に包み、血の滴るまま鞍につけて、市木の関所めがけて馬を走ら

せた。

伝助は、関所で事情を説明し、不義密通を誅した時の決まりによつて金子何がしかを置いて、浜田に戻つていった。

市木の村では、このことがたちまち広まり、大勢の村人が事件の現場見たさで三坂峠に出かけていった。そのころ人情話は人々の関心の的で、たいてい

は渦中の人に対して同情的であつた。その人の群の中に市木の庄屋もいた。実は芸州の技師団が浜田に向かうとき、この庄屋の屋敷に一泊した縁があつたことから、関所で事の次第を聞いた庄屋は、村の衆を集めて三坂峠に放置されていた勘兵衛とお蓮の、首のない遺体を葬るために峠に出向いたのである。庄屋自身は、勘兵衛なる人物が技師団の中のどの人なのかも知らなかつたが、数か月前に一泊した中の

一人と聞いて何かの縁を感じたのであつた。

以来、『お蓮、勘兵衛 悲恋の墓』として三坂峠には小さな墓石が人目に触れることもあまりないまま今も残っているのである。

## 第二話 《緑のトンネルで》

男は人生に疲れてふらつと旅に出た。見知らぬ乗客と肩を並べて長い時間車上の人となるのは嫌だった。自分の車で走ると、あつという間に別の場所に行ってしまった。これもいま男が考えているテンポではなかった。結局歩いてみようという結論に達して出かけた旅であつた。

会社には、医者に温泉でゆつくり湯治したほうがいいと言われたことにして、二回の土日を含めて九日間連続で休めるように休暇を取った。男は普段休暇を取ることがほとんど無かったので、会社は何も言わずに認めてくれた。会社には湯治と言ったものの、男は初めからそのつもりはなかった。休暇を取ったときには、すでに徒歩旅行と決めていた。本当に体の調子が悪かったわけではない。会社を離れて

のんびりしさえすれば、精神的な疲労も少しはよくなるだろうと思つた。気にかかるとすれば、湯治と言つておいて、日に焼けて出社することになりそうだと、言うことぐらいであつた。それにしたところ、会社も湯治を条件に休暇を認めたわけではないのだからと、男はたいして問題にしていなかった。と言うより、なぜか休暇が明けてどんな顔で出社するかという具体的なイメージも男にはなかつた。



ただこの旅には大きな目的がひとつ隠されていた。それは会社の同僚の女との逢引であつた。女は人妻で二児の母親である。二人は気が合うことを認め合つていた。しかしそれは肉体関係などのない信頼と親しさという精神的なものであつた。

男が一人旅のために休暇をとることを聞いた女は、「一緒に行きたいな」

と冗談を言った。しかしそれが二人の間で何となく

冗談で無くなり、どちらもこれまでに経験したことのない冒険に踏み出すような期待感を持ったのである。それで、旅の途中のどこかで逢引してみようと言うことになったのであった。

いろいろ考えた末、男が出発して三日目の晩に泊まる瑞穂の宿が逢引の場所と決まった。女はその日の昼から休暇をとって、浜田道の高速バスで瑞穂まで来ることになった。男は宿に二人分の予約を入れ

ていた。

その日、女が先に着いて宿の部屋で男を待った。

女は家に、高校時代の仲良しグループ三人で一泊旅行すると言つて出てきたのだった。

男は、女が着いてから二時間もしてから、途中雨に降られて濡れた姿でやつて来た。男が着替えをすませてから、二人は宿の前にある小さな田舎レスト

ランで早い夕食をすませて宿の部屋に戻った。

宿ではその日たまたま何処かの団体が入っていて、カラオケの大きな音が部屋まで聞こえてきたが、二人は気にならなかつた。二人とも妻以外の女も夫以外の男も初めてだつた。どちらもこのことで自分たちの人生を狂わせようとは考えていなかつた。ただ好ましく思っている相手との一回だけの逢瀬と決めていた。そう決めていたことで、二人の間には陰湿

な不倫という感覚はなかった。

部屋に入った二人は静かに抱き合い、唇を合わせた。感情が高まりベッドに倒れこむと無言で激しく愛撫しあつた。男が下着をとろうとしたとき、女にほんの少し躊躇する態度が見えた。それを見逃さなかつた男は、それ以上ことを進めるのをやめた。男の中にも同じような気持ちがあつたからである。女は小さな声で謝つた。しかし二人とも興奮の高まり

は大きかったもので、それなりの満足感に包まれて、抱き合つたまま眠りに着いた。そこには、むしろ過ちにいたらなかつたことへの安堵感もあつた。

翌日、男は旭温泉まで歩き、女は再びバスで帰ることになつていた。しかしそのときになつてみると、すぐにバスで帰つても午前中の早い時間に帰宅してしまうことになる。女は、自分も男と一緒に歩いて

みると言いだした。やはり昨夜の中途半端さが女をそういう気持ちにさせたのかもしれないと男は思った。旭についてからバスに乗っても夕方には帰宅できるところからそれでいいと言うのだ。さいわい女はスニーカーにスラックスといういでたちである。

昨日夕飯をしたレストランで朝食をすませ、弁当代わりのパンと飲み物を買って二人は歩き始めた。この日は薄曇で歩くには快適だった。いつも会社で

顔を合わせている二人には、特別に変わった話も無く、快く風を感じながら、車も人もめったに通らない道を言葉少なく歩き続けた。ただ二人の中には、誰にも話せない秘密を共有しているという満足感が満ちていた。

三坂峠の薄暗いトンネルを過ぎると、『お蓮・勘兵衛 悲恋の墓』という小さな石碑があつた。二人はその横の案内板を読んだ。



「この人たちも不倫だったのね。私たちを追ってくるのは誰でしょう」

と女は冗談ぽく言つて男の腕にすがりついた。男は女の肩を軽く抱いて額に口づけした。

まもなく石碑の説明にあつた市木の集落を通り過ぎ、速水溪谷にさしかかった。大きな石がごろごろした、少し広くなつた川原に下りて買つてきたパンを食べた。二人は、きのう出会つてからずっと一緒に

に過ごしている幸福を体中に感じていた。川原の上空を何羽ものトンビが、二人が弁当を食べている間ずっと舞い続けていた。

旭峽という矢印の案内があつたとき、まだ時間が早かつたので峡谷まで降りてみることにした。狭くて急な坂や石段を降りると、滝の音が聞こえてきた。二人は滝が見えるところまで行って、飛沫がかかり

そんな大きな岩で、男が広げたバスタオルを敷いて休んだ。薄曇りの中とはいえ何時間も歩いてきた身体にはここの涼しさが快い。

腰が接するくらいにして座っている二人は、どちらからとも無く抱きあい、唇を求め合った。男が女の胸をさわると、女は激しく男にしがみついた。二人はそのまま快樂に身を任せていった。

余韻に浸っていると、どこからともなく蚊が集ま

つてきた。仕方なく二人は、腕や脚についたコケや泥を瀬水で洗ってから、谷底から急な坂を登って国道に出た。

旭の温泉宿が並ぶ街並みに入る前に、高速バスの停留所があり、そこから女は名残惜しそうにバスに乗った。六時か七時には帰宅できるだろう。男はそのまま旭温泉の宿に向かった。予約していた宿までは十分もかからなかった。

広島の家を出てから四泊目の宿である。この宿は以前一度泊まったことがあった。宿の主人も男のこゝとを覚えていて、前回泊まったときのことなどを懐かしく話した。

この旅には、昨日の瑞穂のことを除くと目的地というものはなかったが、八日目に鉄道かバスかで家に帰ることだけを決めていた。七日間をどんなに一生懸命歩いて、乗り物を使えば半日か一日で帰れ

るところまでしか行けない。男は、登山道のような山道に入るつもりはなく、県道か国道を歩くことにしていた。夜は前の晩に予約した宿に泊まるという、堅実な方法をとっていた。だから、宿があるような街には必ず何らかの交通手段はあると考えたのである。あと一日残った休暇は、仕事に復帰するための骨休みの日に当てていた。

・早い時間に宿に着いて、一番風呂に入り、食事を

してから、道路地図で翌日のコースを決め、電話で宿を予約するということの繰り返しでここまで来た。ただし瑞穂の宿だけは旅に出る前に予約したのだった。

あす五日目は浜田まで行くことにした。ついに中国山地を横断して日本海が見られると思うと明日の歩きが楽しみになるのだった。宿は浜田駅前のホテルが予約できた。

四日間歩いてきたが特に疲れがたまつたような感じはないと男は思った。普段からジョギングなどで運動はしているから、今回の徒歩など軽いものだと、このペースに自信が出てきた。一人旅の宿の夜は何もすることがない。テレビにあきたら寝てしまふ。普段の生活より寝る時間は早い。睡眠時間も十分に取れる。程よい疲れでかえってよく眠れるような気がしていた。しかしこの日だけは、昨夜からつい先



ほどまで女と過ごした情熱的な余韻が体中に渦巻いていて、なかなか寝付かれない。男は高まる興奮を自ら解いてからようやくやく眠りに着いた。

その夜中、男は軽い胸痛で目が覚めた。男は、この件で医者に見てもらったことがあった。すぐどうということではないが、狭心症や心筋梗塞に気をつけるように言われていた。胸痛はこれまでもときどきあったので、特に気にとめなかった。いつもの

ように、胸痛は間もなく治まり、知らないうちに眠りに落ちていった。

五日目の朝、男が目を覚まして部屋の外を見ると濃い霧が立ち込めていた。しかし朝食をすませて宿を発つ九時ごろには、霧は晴れはじめていてこの日も薄日が漏れる天気であつた。今朝のテレビでも曇りのち晴れと言っていたが、そのとおりでなと男は

空を見上げた。梅雨時とあつて、出発から三日間は雨に降られたが、きのうからは梅雨の晴れ間と言つたところである。歩くのにはちようどよかつた。浜田駅のあたりまでは二十三、四キロだろうと男は地図から読み取っていた。今日もゆつたりと行けると思つた。

出発してすぐ、とんびが一羽男のすぐ前の道路に降りた。男が近づくと大きな羽音を立てて飛び立つ

た。男は、自分の家の周りで鳥を間近に見て結構大きな鳥だと思ったことがあるが、とんびはさらに堂々として立派だと思った。また飛び立つときの羽音の大きさにはびっくりした。しかし一旦上空に舞い上がると、羽を動かすこともなく長い時間ゆうゆうと尾で舵を取りながら滑空する。とんびはしばらく上空から男を見下ろしながら旋回していたが、やがてどこかに飛び去った。

男は道端に咲いている宵待ち草の、まったく汚れない黄色に心を打たれた。男は菜の花の黄色が好きだったが、菜の花より淡い宵待ち草の黄色もなかなかのものだ。近くでよく見ると、花びらは透き通るように薄く、映画で見たアラビアの踊り子のまわっている薄物のように色っぽいと男は思った。

前から来たマイクロバスの運転手が男に声をかけた。今出てきた宿の主人だった。客をどこかに送つ

て来た帰りだろう。

「お気をつけて」

と言う声を背に男は、今日も一日歩きつづけるのだと気分を引き締めた。

男は県道を浜田に向かつて歩きだす前に、少し寄り道をして地元の歴史資料館を覗いてみることにした。少しの寄り道と思つて歩き出したが、実際には

資料館まで二十分もかかった。資料館は蔵のような建物で、その大きな扉は重々しく閉まっていた。そして張り紙に、見学を希望される方はインターホンで教育課まで連絡して下さいと書いてある。これを見て男は面倒くさくなり、資料館見学を諦めていま来た道を歩き出した。

資料館まで無駄足だったせいもあって、まだ朝のうちだと言うのに、なんとなく疲労の蓄積がほんの

僅かだがあるような気がしてきた。荷物が重い。今朝宿で量ってみたら十キロだった。たった十キロがこんなに重く感じられるのかと、男は自分が非力なことを情けなく思った。

男は、仕事で南アルプスの山中の現場に、かなり重い荷を背負って行ったときのことを思い出した。予定では目的地まで車で行けるはずであったが、



途中に崖崩れで車が通れないところがあり、そこから先はめいめいが現場で必要な荷物を担いで歩くことになった。もともと現場はトンネルの中で、そこでは荷物を担いで入らなければならぬことがわかっていたので、その日の関係者はみなそのような準備で来ていた。それが現場よりずっと手前でも役に立ったのである。

崖崩れの現場では、一旦谷底まで降りてふたたび、

崩れた向こう側の道に登っていく。男が荷の重さによろよろしながら足場の悪い細い道を歩いていると、たまたま比較的小さな荷しか無かった体格のいい若者がひよいと男の荷物を取って代わりに運んでくれた。男は小さい方の若者の荷物を持つと言ったが、若者は何でもないからと言って両方とも担いで歩いた。

男には、若者が二つの荷を軽々と運んでいるよう

に見えた。そして自分の非力をしみじみと感じた。二人分の荷物を背負って急な坂を力強く登っていく若者の後ろから、男は荷物もないのに息をぜいぜい言わせながらついていった。前を行く若者の尻から腿にかけての筋肉の逞しさと、何の苦も無いように行く肉体の充実を羨ましくもまぶしく感じながら歩いたのだった。男はその若者ほどではないにしても、自分にもそのように充実した肉体の時期があつたこ

とを思い出していた。社員旅行で九重山に登ったときも、石鎚山に登ったときも、男の頼もしさがみんなに頼りにされたものだ。年令が男のそのような肉体の充実を、有無を言わず押し流してしまつたのだ。男は五十五才であつた。

金城町に入ると道路わきに大きな案内板があつた。浜田へ十一キロ、今朝出てきた旭へは十二キロとあ

る。男は、半分来たのかと思つた。まだ二時間半くらいしか歩いていない。

「カチューシャかわいや、新劇の父、島村抱月生誕の地、金城町」

という看板が目につく。男は、島村抱月公園とか島村抱月の墓といった案内板を見ながらゆつくり歩いた。十二時を少し過ぎたころ、運よく昼食の店に行き当たつた。

『三平』という、夜はスナックになる店であった。

そのとき店にはおばあさん一人で、客も男だけだった。おばあさんが注文を取りに来たとき持ってきた熱いハブ茶が美味しくて、男は何杯もお代わりをした。メニューを見てみるとおばあさんが、

「これと、これと、これくらいだね」

と出来るものを指定した。男は言われた中から冷やし中華を頼んだ。特に好きな食べ物ではなかったが、

好きなものは夜浜田で食べればいい。止まり木のよ  
うなカウンターに向こうで調理しているおばあさん  
の姿が見えていた。出来てきた冷やし中華は、男が  
予想したよりもずっと美味しかった。

この昼食が男にとって最後の食事になるとは、も  
ちろんこのとき男は知る由もない。昼食をすませて  
しばらく歩くと、山間のあまり広くない道になった。  
山間といっても周りは低い丘陵ばかりで、いかにも

海が近い土地に来たという感じである。男はカーブを曲がるたびに、前方に日本海が見えるのではないかと期待した。男はそう思いながらいくつカーブを曲がったただろうか。どこまでいっても、その先には同じような丘陵の中の道が続いているばかりであった。

男の前方の道にとんびが降りていたが、男が近づいたので飛び立った。地面すれすれに飛んでから、



向きを変えてふたたび男の方にやってきた。そして男をかすめるようにしてから上空に舞い上がった。

とんびは男の頭上をしばらく旋回していたが、やがて飛び去った。男はとんびが自分を狙っているのかと少し不安であつた。きのう石碑を読んだとき女が、「この人たちも不倫だつたのね。私たちを追つてくるのは誰でしょう」

と言つたのを思い出した。しかし、間近にせまつた

時の目の鋭さといい羽を広げた大きさといい、実に立派な鳥だと思った。男は、しばしば自分の前に現れるとんびを、自分をどこかに導いているような感じがあった。

小さな峠になっているところに差し掛かると両側に高い樹が続いていて道は緑のトンネルになり、木漏れ日が気持ち良い。男は立ち止まって見上げた。逆光線に木の葉の若い緑が輝いている。前方から車

がやつてきて、道端の草の綿毛を巻き上げて通り過ぎていった。巻き上げられた綿毛は空中に浮かんで日の光を受けながら、男の顔にも降りかかってくる。

男はリュックを降ろして道の縁の石に腰掛けた。それにしても今日は荷物が肩に食い込んで痛いし、やたらに重い。男はリュックの紐の当たっていたあたりをさすった。肩だけでなく、首から背中にかけて広い範囲に痛みが広がっていた。男は、リュック

からペットボトルを取り出して、レモン味の飲み物を飲んだ。途中の自動販売機で買ったときの冷たさはもうなかったが、実に美味しかった。男は一息ついてからあらためて周囲を見渡した。青空と木の緑のコントラストが見事だ。男はゆっくりと眺め回しながら、緑色には随分いろいろな種類があるものだと思つた。

男は、自分の家から遠く離れて、人里はなれたと

ころに一人でいることを強く感じた。日常のいろいろな生活、仕事も趣味も、習慣として毎日していること、家族や知っている人たち、そういうことから遠く離れてこうやってたった一人で風に吹かれていく。小鳥の声に囲まれて坐っている。昨日の女とこのことさえも遠くの出来事のように感じた。何も考えずにぼんやり、道の向かい側の緑を見、うぐいすが鳴き交わす声を聞いている。うぐいすの声に聞き入

っているわけでもない。あと二時間も歩けば宿につくということもいまは考えていなかった。男はとんびが鳴くのを聞いた。今日は出かけてすぐのときにも、ついさつきもずいぶん自分の近くに飛んできたなと思った。女がいうようにあのとんびは追っ手なのかも知れない。そのとき初めて男は、何も知らないで一人で家にいる妻を裏切ったことを思った。女は無事彼女の家庭に戻っただろうかとも思った。そ

れもぼんやり思っているだけであつた。ぼんやりといつても、眠いのもない。これが無我の境地というのだろうか。これが旅というものなのだろうか。

男は胸のあたりに、コトンと衝撃のようなものを感じた。つばを飲み込もうとしたが、のどの奥が乾いてへばりついたような感じで飲み込めなかつた。逆光線に光る緑と、青空と、まぶしい日の光がごつ

ちやになつて男に降りかかつて来たと思つた。男はほんの一瞬だが、緑がおおいかぶさり青空が輝いて、とんびがゆつたりと舞つているところに吸い込まれるような気がした。

五分後に通りかかった車が、道端に横たわつてい  
る男を見つけた。手に持ったペットボトルから飲み  
物が流れ出ているので、倒れたのだとわかつて救急



車を呼んだ。

救急車が来たときには、男は死んでいた。自然の中に生命が溶け出してしまったような死であつた。

(完)

## 編集後記

第一話の《お蓮・勘兵衛の墓》について、取材に基づいて著者の残した文章がありましたので、ここに付記します。

《お蓮・勘兵衛の墓の由来》

浜田牛市の秤屋（はかりや）勘兵衛は、早く妻に

死別して男やもめを通していた。そのころ町同心の某は身体が弱く勤務も怠りがちであつた。勘兵衛は秤の検査が至極ひまなので、内々でその同心の仕事の援助をしてやるようになり、同心はまた勘兵衛が専門の同心以上に目がきくので非常に頼りにし、同心の内室お蓮は「秤屋さんは金に屈託はないだろうが、御世話になる御礼のしるしに裁縫、洗濯などをしてあげよう。」と親切に勘兵衛父子の洗濯、衣類の

繕いなどしてやっていた。そのうちに一人息子が病死してしまった。独りになった勘兵衛はいつの程にか財産も使い果たしてしまい、挙句の果てには思案の外の内室お蓮と人目を忍ぶ特別の仲になってしまった。この道はいつの世も同じで、わけても狭い城下町のこと、だんだん世間に騒がれるようになってきたからたまらない。居るに居られず手に手をとつてとうとう駆落ちをしてしまった。

当時の藩の掟として、士族の女房が不義の噂が立つと「風聞宜しからざるに付き謹慎申し付く」と、本夫は閉門になる。また駆落ちなどに対しては本夫は「閨門治らず」と減禄され、重いのは本人一代おいとまとなる。そしてもし姦夫姦婦を共に成敗すれば、一切咎めなしということになっていた。また平民の姦通でも重ね斬りは殺人罪にはならなかった。そこで本夫の同心は、お上から処分のないうちにと、

病氣欠勤届を出しておいて、早速二人の跡を追うて  
広島街道を急いだ。ようやくにして市木、三坂を越  
え芸州大塚で二人に追い付き捕らえることができた  
けれど、他領地で殺せば事が面倒になるので「共に  
浜田へ帰った上離縁状も与えて、公然と夫婦別れを  
し勘兵衛と晴れて夫婦にしてやる」と二人をすかし  
て市木、三坂まで連れ帰り「ここから浜田領だ。ち  
よつと言い聞かすことがある。」と二人を土下座させ、

抜く手も見せず二人を斬つてしまつた。

首は油紙、風呂敷に包んで持ち帰り、帰りがけ市木の役所へ立ち寄り、一切の事情を語り「三坂峠に首無死体が二つある。その死体に金があるであろうけれど、もし無かつたときに御迷惑だから、これを葬式料の足しにしてもらいたい。こういえば死んだ女房に未練があるとお笑いかも知れないが、決して未練は露ほどもないけれど、平常武士だと威張つて

おきながら、家のためとはいえ二人をだまして殺した罪は自分にあるのだから、かく頼み入る次第」といい置いて浜田へ帰っていった。庄屋は村人に死体の片付けを命じたので、村人は道端に埋葬し墓石をたて、時折香華をたむけてきたものである。

以上が三坂峠のお蓮、勘兵衛の墓の由来である。これは安政四年に起こったものらしい。(大島幾太郎氏著桜井地方史より)



(以上は『瑞穂町史第一集』に収録されたもの。

二〇〇二年二月二七日島根県瑞穂町の教育委員会文化財課の盛岡氏にフアックスしてもらった資料から転記)

《三坂峠で見た看板の内容》

ーお蓮・勘兵衛悲恋の墓ー

お蓮・勘兵衛由来記。安政四年一八五七年の出来

事。浜田藩主松平武聡の下役人同心某の妻お蓮は、病人勘兵衛の世話をしているうちに掟に反して恋仲となり、二人手を取り合つて芸州藩大塚まで逃げのびたが、後を追う夫某に捕まり、二人はれて夫婦にするという甘言に惑わされこの関所まで連れもどされたが、それぞれ首を斬られてしまった。夫某はその首を持って市木代官所に立ち寄り、矛罰料を置き浜田藩に帰つた。市木の庄屋は村人と手厚く葬り、

墓石を立てて長く二人の霊を慰めて今日に至る。  
(以上は著者が看板から書写したもの)

編者 山中伶子記

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。



## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

## 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏



親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

三坂峠二話

第一話《お蓮、勘兵衛 悲恋の墓》

第二話《緑のトンネルで》

---

2022年9月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

[www.photo-ac.com](http://www.photo-ac.com)

タイトル：世界遺産 熊野古道 木漏れ日

作者：はなちょこさん

写真のID：24370460

[www.silhouette-ac.com](http://www.silhouette-ac.com)

タイトル：競馬

作者：johanさん

イラストのID：2595648

[www.illust-ac.com](http://www.illust-ac.com)

タイトル：旅道中

作者：cocoancoさん

イラストのID：1448186

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---